

中信高校山岳部かわらばん

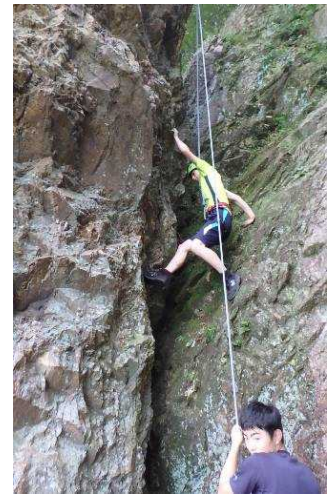
編集責任者 大西 浩

大町岳陽高等学校

学校近辺のゲレンデで岩登り

大町というところは、山も近いが、長野県の中ではクライミングをする環境にも恵まれている。普段は大町運動公園の人工壁や学校内のボルダー壁、また山岳総合センターのボルダー壁でクライミングも楽しんでいる。しかし、インドアはあくまでもインドアだ。できれば外岩につれていきたいし、その楽しさを知ってほしいと思っている。

僕らが若いころは、人工壁などなかったから、発想がちがう。1990年代の初めまでは、国体も自然壁でやっていた。もちろん技術レベルでいえば、どのようなグレードでもつくれ、それを反復練習できる人工壁のほうが、短期間ではるかに高いレベルに容易に到達できる。しかし、初めから外岩でやった僕らにとって、フォールすることは許されな



かった。だから、時に彼らは僕らには考えられないようなムーブで困難なボルダー壁を乗り越える。その典型が、一か八かを掛けたランジやアクロバティックなヒールフックといえるだろう。いわば、落ちることを前提にした岩登りと、落ちたら負けの岩登りの違いと言ったらいいのか？もちろん、僕とて、だからといって、彼らがインドアで楽しむのを規制などしないし、むしろそれを積極的に活動に取り入れもする。昨年度末には、統合校である大町北高校にあったボルダー壁を本校に移設したので、校内でもいつでもボルダリングができる環境が整っている。しかし、それはそれとして、やはりそれは自然壁とは違う。人工壁やボルダー壁を前にして外岩のことを言っても、生徒たちには通じない。それは当たり前のことだ。体験したことがないのだから。

案ずるより産むがやすし。できるだけ、外岩にも連れて行ってやりたい。今年はなかなか余裕がなくて連れていけなかったが、先日、ようやく機会をもつことができた。場所は学校から南西に7 kmほどのところにある通称「ぬすつと岩」。初心者にも手ごろなゲレンデだ。ルートも複数とれ、岩も安定している。

この日は2年生2人と1年生が9人、自然の岩の感触を楽しんだ。人工壁だからといって真剣にやっていないとは言わないし、そのつもりもないが、安全が確保されている

とはいえ、やはり外岩と人工壁は違う。外岩に連れていくと、ロープの扱い一つ、スリングの結び方一つ、どの一つをとっても覚えが違う。

本校の山岳部の活動は、オールラウンドなアルピニストを究極の目標に、様々な活動に取り組んでいる。これもその一環だが、長野県内全体を見回しても、外岩に連れていける顧問はおそらく多く見積もっても15人、実質的には10人に満たないのではないだろうか？学校の枠組みを超えて、こういうことを一緒にできる仲間が一人でも増えてほしいものだと思っている。

今年のインターハイ雑感

夏休みのことを今頃になって振り返っている。今年の夏は暑い夏だった。岡山で行われたインターハイに長野県からは男子が大町岳陽高校、女子は松本県ヶ丘高校が出場した。僕は、大会中は役員のため、監督をすることはもちろん山に入ることもしないで、ここ数年インターハイの1週間はストレスがたまる期間であった。しかし、今年は勤務先校が出場ということで、1日から岡山入り、3日間の大会前の下見で全コースを生徒ともに歩いた。地元の人には、夏には登らないという「蒜山」ではあったが、登ったことのない山、知らない山に登るとするのは楽しい経験だった。前身の大町高校時代に最後にIHに出場したのは、6年前の霧島の大会で、当時は僕はまだ赴任する前の事。生徒たちもそのころのノウハウは持つべくもない。ノウハウで結果が決まるというような負け惜しみを言いたくはないが、しかし、6年の空白はすべてがゼロからのスタートだった。その意味では、今回の生徒たちは本当にまじめにかつ真剣に取り組んでくれた。自身、全国の副部長をしていながら、大会そのものについて「改めてそうだったっけ」と思い知らされる部分も多くあって、とても勉強になった。

さて、この項の冒頭に書いた通り、今年の大会は暑さとの戦いとなった。岡山高体連の皆さんのおかげで、大会は無事終了したが、いくつかの課題も浮き彫りになったと思う。このことについては、11月に行われる秋季常任委員会でも議論されることになると思うが、筆者の感想を書いておきたい。

今大会は、ここ数年の流れの中で導入されたチーム行動が全面的に導入された大会になった。登山行動日は3日間ともにA隊、B隊が同一コースで、すべてがチーム行動になった。A隊が出発した後、時間差をつけてB隊が出発するということになるわけだが、A隊の遅れ（B隊の追いつき）について、しっかりシミュレーションしておく必要があると感じた。支援やドクターの位置にも工夫が必要であろう。今回の大会では、多くのチームが暑さから、また山行に不慣れなため、熱中症となり、結果いくつかのチームが行動離脱するという事態が発生した。翌日復帰できないまま、棄権したチーム、復活しても再発したチームなどが予想以上に多かったが、このことの原因は上記に加えて、チーム行動方式における規定時間をどのように審査されるかということに対する疑心暗鬼がオーバーペースを生んだ結果と思われた。この疑心暗鬼状態をいかに解消するかは大きな課題だろう。さらに、時間の経過とともに暑さはうなぎのぼりになるため、この気温上昇が特に後に行動を開始したB隊に影響を与えたということも課題である。

また、コース中の事故に対する対応が情報不足により後手に回った部分もあったが、チーム行動であるという性格上、こういった事態は今後も起こりうる。その点で原因究明と、安全策の向上、危急時対応策については改めて検討すべきだと感じた次第。